

後輩のサマナー生活

むむむ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

後輩の視点の（非）日常。
表

<https://syosetu.org/novel/269551/?s=09>

目次

| | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 第7話 | 第6話 | 第5話 | 第4話 | 第3話 | 第2話 | 第1話 |
| 29 | 25 | 20 | 16 | 10 | 6 | 1 |

第1話

「くう！ 取れない！」

「好きだよねーこのキャラ」

「そりや最推し様ですものー」

UFOキヤツチャーに齧り付く友達二人を眺める。

久しぶりにゲーセンにきたけど楽しい……かな？

うるさすぎて耳が痛かったりする。

友達と一緒にだから楽しさは感じられる。

……一人なら絶対に行かない。

「ねー！ これ取れる？」

どうしても欲しいのか手招きをされる。

「無理」

やったことないし。

「無理かー」

「ふっふ仕方ありませんなー。この私めが取って差し上げましょう！」

ない胸を張ってドヤる。

「キヤツチャー力も胸も5のゴミに取れるわけないでしょ」

「なんですと!?! ……胸はいいじゃん！ 貧乳はステータス！ 古事

記にもそう書いてあるー！」

書いてないです。

なんでゲーセンでコントをしてるんだろ。相変わらず仲が良いなあ。

? ……わっ。

「なーにポーつとしてんの。楽しまなきやそんよ？」

「そうそうー最近アンタ仕事潰けなんだし遊べる時に遊んどかないとハゲるよ？」

「……うん！ あと一言余計」

まだ全然ハゲませんー。これでもクラスの中で一番長いんですー。

「あははーめんごめんご」

「ウチらだけ楽しんでもしよーがないし……ね？」

小学生の時から一緒の二人。

……私が一人暮らしで大変だから気にかけてくれる。……大切な友達。

一番大切な宝物。

「分かってるって……これ取ればいいの？」

友達がやっていたUFOキャッチャー。

シンプルな挟むタイプ。……一回三百円だ。……高いなあ。

一回だけならいつか。

なけなしのお金を投入口に入れる。

真上で止めればいい……かな？

「……お？ 取ってくれるの？」

「取れるか分からないけど……あ、取れた」

見事に景品を挟み込みすくい上げるとあつという間に出口へと運び落としていった。

……本当に取れたんだ。

「嘘!? マジじゃん! ありがと！」

颯爽と出口に手を突っ込み景品を取る友人は満面の笑みを浮かべている。

「これがビギナーズラック……」

「5とは大違い」

「……泣くよ？」

「泣け泣けー」

嘘泣きをサラツと受け流していく。

ふふっ……もう本当に――

「んー? なんか人集りできてっけどイベントなんてあつたっけ？」

嘘泣きはほんの数秒で終わった。

すぐ隣。……音ゲーが沢山あるエリアを友達が訝しげに眺めている。

分かるはずもなく友達二人も知らない。ここは地元のゲームセンター。お世辞にも充実している訳じゃない。

イベントなんて年に一回あるかないぐらいでバイト募集だつてしているのに……。

「結構楽しいじゃないこのゲーむつて遊戯。いい汗かけるわあ」

「はあ、はあ……そうですね。キッツ……」

先輩!? ……と綺麗な人がダンスをしていた。

「運動不足う? ダメよ? ちゃんと運動しないと……」

「あはは……肝に免じときます……」

額を汗を拭う。

手を膝につけ産まれたての子鹿のように震えている先輩を見て微笑んでいた。

ダンスゲームのリザルト画面にはフルコンボと表示され綺麗なエフェクトが彩っていた。

「うっひやー鬼畜曲の最高難易度を揃ってフルコンボとかおつかねー。……って先輩じゃん? 隣の美人さんは彼女?」

「先輩ってゲームセンターとか行くんだー。この情報は高く売れる……!」

呆然としている私を他所に友達二人は人集りと一緒にスマホで先輩たちを撮っていた。

またSNSで稼ぐのかなあ。

バレたら怒られ……ないとは思うけど。

先輩モテるし彼女ぐらいいるよね。

はあ……なんかフラれた気分。

そ、それは飲み込んで……。

……悪魔召喚プログラム。

調べても一番上にはメシア教。二番目にはガイア教の公式サイトで悪魔召喚プログラムのことは何ひとつ分からなかった。

開発元の会社を調べても一件もヒットしない。……確かSTEVEN・ENって……名前だったかな。

一番上には英語園の名前。二番目には映画監督の名前。……悪魔を調べても同じだった。

本当になんにも分からなかった。

「……おーい生きてるー?」

「そつとしておこう。多分先輩に彼女がいたから放心してるんだよ。バイト先に先輩が来て頭などでなでして貰ったとか嬉しそうに話してたじゃん。……ね?」

「あー……失恋かあ」

「勝手に話を広げないで! 失恋とか…してないし」
ちよつとは……期待したけど。

「慰めてあげるから泣いちゃだーめよ」

「泣くわけないでしょ!」

嬉しき余り勢いに任せて自慢するんじゃない。この恋愛ス
イーツ脳たちめ……。

「にやはは。そもそも先輩と住む世界が違うんだからしゃーない
しゃーない。……手頃な男紹介しよつか?」

「そこはあえて女を紹介」

「あーもう!! この話は終わり!」

じゃないと帰るから。

ふんす!

「はいはい。話変わるんだけどさ。…明後日空いてる?」

「開いてるー」

「知ってるー。あんたじゃなくて……仕事とかある?」

「明後日……」

仕事もないし学校もない。

休み……だけど……。

「ごめん」

その日くらいはゆっくり休息をとりたい。

「そっかー。他のみなも誘ってるんだけどさ。面白いもの手に入れた
んだよね」

面白いもの……?」

「そんなこと言ってたよねー教えてよー」

私がない間に何かあったみたい。

「だーめ! 明後日までのお楽しみってことで……」

お楽しみ……。

行かないから結局分からないじゃん。

「けちー」

「ケチで結構！ で、どうする？ まだゲーセンに入り浸る？ それともカラオケ行く？」

「……あ」

先輩がいない。

いつの間にかゲームセンターから消えていた。

先輩………。

「どうしたー？」

「……なんでもない。カラオケだっけ？ ……行こう」

「じゃカラオケで！ 失恋ソング沢山歌っちゃお！」

「失恋フルタイム！」

「……本当に怒るよ？」

全く。……今はいいや。

今だけは友達と楽しい時間に浸ろう。

時間は大切だから……。

第2話

「……取り敢えず入れてみたけど」

特に何も起きなかった。

悪魔召喚プログラムを開いて見てもよく分からなかった。

悪魔召喚、デビルアナライズ、スキルクラク、デビルオークション、邪教の館と謎のコマンド。

まだあるけど条件を満たしてないのか解放されてないみたい。

左上にはソシヤゲにありがちのお金なのかな？ MAGと……☒

？ なんて読むの？

MAGが500。☒が0と表示されていた。

赤と黒で構成された気味の悪いUIとデザイン。

試しに悪魔召喚をタップしても召喚できる悪魔がいませんとエラーになる。

……なに？ これ…状態。

「やっぱり噂は噂……かあ」

スマホをベッドに放り投げる。

続いて私もベッドに寝転んだ。

「……悪魔かあ」

あのわんちゃん？ は喋ってたし悪魔と口にしていた。

……話から察して悪魔ってことだよな。

悪魔召喚プログラムを入れても悪魔は召喚できない。そう、いないから。

「悪魔を捕まえないといけないのかな」

わんちゃんはまだ可愛いかったから良かったけど……。

……悪魔。

想像してもおぞましい姿しか思い浮かばない。そんなヤバいのを捕まえろってこと……？

「無理に決まってるんじゃない」

私に……人間にできるわけがないよ…。

「……結局バイト漬けコースかあ」

願いが叶う……わけないよね。

「……お腹空いた」

学校もバイトも休み。

……家には誰もいない。

私以外……誰もいない。

一人暮らしだし仕方ないかあ。

「……う？」

物音？

……窓の方から。

閉じきった窓を開けて外を見る。

「……気のせい？」

誰もいない。

「寒い」

真冬に窓を開けるのは自殺行為。

直ぐに閉めて鍵をかける。

ただ寒い思いをしただけだった。

「……あっ」

冷蔵庫空っぽだ……。

朝はコンビニ二昼は食堂夜はバイトのまかないを食べてたから料理をするの今日みたいな休みの日だけ。

「買い物……行かなくちゃ」

スマホを手に持ち起き上が――

「……電話？」

友達からだ。

そういえば面白いものが手に入ったとか自慢してたっけ。

誘われたけどゆっくりしたかったから断って……。

当日まで秘密って言われてそれまでだった。

「もしもしっ？ どうし」

「助けて!!」

助けを求める悲鳴。^{ひめい}

遠くからは爆音や悲鳴が木霊^{こだま}していた。

「どうしたの!!」

「違法COMPを起動したら悪魔が出てきて襲いかかったきて……!」

みんな……みんな……」

「悪魔!? ……と違法COMP?」

……聞きたいことはあるけど――

「場所は!!」

「最近閉院した廃病――」

「っ!?!」

バチツ……。

音と共に電話が切れた。

………悪魔。

「行かないと……」

最近閉院した廃病院。

……彼処あそこしかない。

大丈夫。……友達を見つけたら連れて逃げればいい。

逃げ切ったら警察に通報する。

……大丈夫。

「もしもの為に……」

スマホを握り締め部屋から飛び出した。

「つたく。……誰かが違法COMPを起動しやがった」

まさかこんなところにまで広まってるとは。

COMPから上司に送られてきたメールに顔を顰める。

最優先に違法COMPを回収または破壊しろ。……召喚者の生死

は問わない、か。

後処理どうすりゃいいんだよ。

「……面倒くせえな」

「仕方ない。この辺りにサマナーは彼しかいないからな」

その通りだな。

定期報告さえなきやこんなところ来ない。

「戦えるならなんでもいいぜー!」

「友は相変わらず脳筋だ」

……戦闘能力だけは高いからな。
戦闘能力だけはな。

「目的地は隣駅の……」

廃病院、か。

「これって経費で落ちると思うか？」

「無理だと思っぞ」

……だよなあ。

分かった。ああ、分かったさ。

「フリーランスも視野に入れるか」

末端サマナーつれえわ。

「行こうぜサマナー」

「あいあい」

しかし少年の周りで異変。……メシアとガイアの動向もそうだが
きな臭くなってきたな。

……一体何が起こってんだ。

第3話

「……、だよね」

廃病院の前に立つ。

電話越しから聞こえた爆音や悲鳴は聞こえない。

無音……気味が悪い。

「……よし」

意を決して中に入る。

暗い。……スマホのライトを使いゆっくり歩く。

……うっ……なに、この臭い……。

肉が焼けたような……。

「……きたよ。どこにいるの？ ……返事をして……っ？」

何かがぶつかった。

足を止めスマホをかざす。

「ひっ……！」

後退る。

……え、な……。

「……ウ……アア……」

呻き声。

黒い人影が這いずり私に真つ黒い手を伸ばす。

「……どうして……なんで……」

体の震えが止まらない。

差し出された手に近づき恐る恐る……それでもしつかりと握った。

友達の手……を。

友達は顔を精一杯上げて私を見つめ……力なく頭を落とした。同

時に握っていた手がするりと抜け落ちていく。

……涙が溢れてきた。

どうしてこんなことになったのか分からない。

分からないけど……これだけは分かっちゃったんだ。

大切な友達が目の前から消えていくことは。

あの満たされた日々は戻ってこない。

戻せない。

……他のみんなも……もう。

まだ分からない。諦めちゃだめ……！

「ふふ、焼き加減を間違えてしまいましたね。ですがいい表情を見させてもらいましたよ」

「っ！」

声が聞こえた。

酷く醜い獣の声……じゃなかった。

言葉を喋る中性的な声。

声の方にスマホを向ける……必要はなかった。病院の割れた窓から月明かりが照らされる。

馬のような頭。孔雀のような羽根。常識から逸脱した化け物が立っている。

周りには黒い塊が転々としている。

その瞬間米粒程の希望は打ち砕かれた。

これが……悪魔。

友達にこんなことをした……悪魔。

怖い。怖い。怖い……だけど――

「……」

「おやおや、とても人間のできる顔ではありませんね」

私には悪魔に対する明確な殺意しかなかった。大切な友達を殺された。

「っ……殺してやる。…殺してやる!!」

無我夢中にその悪魔に向けて駆け出した。

隠し持っていた包丁を手にとって。

「人間にしては珍しいですね。焼いた人間全てが逃げ惑い生を懇願したというのに……」

「うるさいー」

「はあ……なんですかそのナマクラは。そんなものでは……っ！」

悪魔が慌てて腕で体を庇う。

そんなこと関係ない。

……関係ない！

「だまれえ!!」

思っきり振り下ろした。

包丁は悪魔の腕にくい込んだ。

肉を断ち血が――

「が……あ……い……」

一瞬視界が揺らぐ。

浮遊感が体を襲う。

空を飛んでいる。違う。

体が重力に逆らい跳んでいるんだ。

地面に叩きつけられる。

「う……」

痛い……痛い。

ゆっくり手をお腹に当てた。

濡れている。……ドロつとしたヌメリのある何か……ああ、赤い

……。

「……固い？ 殺ったつもりが加減してしまいましたか。しかし私に

傷を付けるとは……火事場の馬鹿力、というものでしょうか。他には

窮鼠猫を噛む？ ああ……とてもいいですよ。まだ諦めてないその

表情……壊したくなりますよ」

「っ……あ……ぐう……」

立たなきゃ……立って……

……足に力が入らない無理やりにでも立って。

頭がぼーつとする。寒い……でも……！

まだ、まだ……っ？ ……っああ!!

太腿に何かが刺さった。

全身に痛みが駆け抜ける。

膝が折れる。

包丁が鏝まで深々と刺さっていた。

刃の先が貫通している。

痛い。そんな言葉では片付けなれなかった。

「今度は加減を間違えないようにしないといせませんね。マグネタイトはあつて損はしませんし」

「ぎい…………う…………い…………」

思うように声が出ない。

「ふふ、顔色が悪いですね。私が温めて上げましょう」

悪魔が手のひらを私に向ける。

…………目が霞んでハッキリとは見えなかった。

…………みんなごめんね。助けられなくてごめんなさい。

もつと早く来ても…………無理、だよね。

きつと…………なにもできなかった。

警察に連絡…………しても無理だったと思う。

これが走馬灯…………なのかな。

色んな思い出が脳裏に過ぎる。

…………先輩。

先輩の顔が浮かぶ。

はは…………最後に先輩を思い浮かべるなんて…………私って本当にチヨ

口いなあ。

頑張れば悪魔に勝てたのかな。

…………冷静になつてくる。

…………痛い。

意識が朦朧としている。痛みで覚醒を繰り返す。

…………ちゃんと謝らないとそしてまた一緒に…………遊んで…………。

気がつくと悪魔の手のひらには火の玉浮いていた。とても大きく

てここからでも熱気を感じられるほど。

…………死んじゃうんだ、私。

不思議と恐怖はない。

だって友達がいるから。

口を歪ませ目を閉じる。

「人間にしては面白かったですよ」

熱気が強くなった。

見えない。だけど確実に…………私に…………。

『召喚できる悪魔が一件見つかりました。召喚を開始します』
抑制のない無機質な声が聞こえる。

「……悪魔召喚プログラム!」

悪魔召喚できるんだ。……あ、れ?

私……悪魔いない。なんで、だ……ろ……。

どうでもい……か。……もう遅いから。

「遅くないさ」

別の声、だ。

火の玉が……こない。

「焼き損ないましたか。時間切れですね」

パトカーのサイレン………?

誰か、通報したんだ。

……助かったん………だ。

薄らと目を開く。

朧気に見えた声の正体は……ス……ーツ……を着た若い男性だ……た……。

「あ……逃げられちゃったか。このまま殺し合ってもボクの完全敗北だったし良しとするか。さてと……お姫様をなんとかしないといけないねえ………」

……遅かったか。

「いねーのかよ」

「急いだが良いのではないか?」

わーってるよ。

サツにしよつぴかれるとか勘弁だ。

しかしひでえもんだな。

全滅……黒焦げなあ。

痛みを知らずに逝けたことを願う。

どいつが召喚者か知らねえが早くCOMPを探してずらるか。
手分けして探す。見つかったもんは辛うじて焼け残った生徒手帳
と壊れたスマホ。

「……ねえー」

「サマナー！ あったぞ！」

「でかしたフォルネウス！」

フォルネウスがCOMPを持ってくる。

相変わらずの頑丈さだな。傷一つついてねえ。……これを破壊と
か上司滅茶苦茶だわ。

電源は付いている、が……………。

……………これは……………。

「……………アプリがねえ」

「なんだと？」

デカラビアが画面を覗き込む。

本来付いてあるサポートアプリは愚か召喚システムすら、だ。……

ただ悪魔を詰めるだけのゴミ箱。

……………起動と共に召喚されるよう細工されてたんだろうな。

とんだビツクリ箱だ。

なんでこんなもんが……………どうやって手に入れたんだ？ ……考え

てる暇はねえ。

「出るぞ」

サツが着いたみたいだ。

裏から回るか。

「……………警察と戦わ」

「戦うわけねえだろ。犯人になっちまうわ！」

「……………友」

ここの戦闘狂が……………。

バトルジャンキー

第4話

「……あれ……っ」

友達は……？ 悪魔は……？

……あのスーツの男性は……？

ここは……私の部屋……。

寝てた……の？

夢……だった、の？

いや……でも、確かに……私は見た……。

悲惨な現場を、悪魔を……友達の最期を……。

「っ！ 電話……ったあっ!？」

全身に激痛が走る。

……っぐう……ううっ……。

歯を食いしぼる。……涙が出てくるほどに痛い。起き上がること

は愚か指先一つ動かせない。

痛い……痛い痛い、痛い。

「……っう……っ……」

息をするのもままならない。

……病院……。……119……。

スマホ、は……？

「だ、め……っ……う……う……」

天井を見ることしかできない。

…………夢じゃないんだ……。

みんな……みんな……。

溢れ出す涙も拭えない。

視界が歪んでいくのを待っただけ……。

そう、だ。目を閉じよう。

暗い方が……落ち着くから。

…………ごめんね。……ごめん、ね。

「なるほど、そういうことね。教えてくれてありがとう」

「あ、いえ……」

「フツ。それじゃ…お元気で」

「は、はい……!」

女性に向けて手を振り歩き出す。

……ここは東京とは違うみたいだ。

当たり前か。ボクだって目的がなければ来ることもないしね。

つい、介入しちゃったけど……。

「この状態はちよつと不味いかな」

理由はマグネタイト不足。これっぽつちじゃ仕方ないね。召喚できたのは奇跡に近い。

瞬間的に増えた彼女の生体マグネタイトを吸収してなんとか人の形を保つことができたわけだし長期間の現界は厳しいよね。

雑魚ならまだしも大物がきたら為す術なくやられちゃうよ。

……一番の問題は彼女の仲魔なっちゃったことだよねえ。

面白い人間がいると聞いて遙々遊びにきたのにさ。……まさか人間の仲魔になるなんてね。

全く……面白いなあ。

「……死なせるのはあと味が悪いよね」

スーパーと薬局の場所は教えて貰ったしお姫様の傷が癒えるまでは大人しくしようか。

あ、これが近道かな。

人気のない路地裏に入る。

それにしても――

「殺意を向けられるのは慣れっただけだよ……今は勘弁して欲しいんだよねえ」

「……気づいたか」

突き当たりで止まり振り返れば初老の男性が立っていたよ。……

鋭い眼光と炎を纏った姿で。

「そりゃ殺気ガンガンにしてればさー馬鹿でも気づくよ。……どちら様？ ボクの記憶じゃ初対面だよね？」

「なら貴様の記憶が欠如しているんだろうな。……ロキ」

っ……ボクの名前を知ってるのか。

……北・欧・の・連・中・には見えないね。

「御明答。ボクは魔王 ロキ。といつても今は不完全な状態なんだ。……本当に知らないんだけど……」

「……ベリアルだ」

男性はみるみる姿を変えていく。纏った炎はカタチを変えトライデントに。……赤い竜人へと変身を遂げた。

はは……ついてないねえ。

いきなりハードモード突入かあ。

「まさかの^{VIP}大物悪魔なんて……参ったなあ」

そういや前に会ったことがあるねえ。

その時はまだ天使だったかな？

だとしてもボクは気づけなかった。

幾ら墮天しようが……本質は変わらない。魔力に変化が生じようが些細なものなんだ。

……もしかして^{スペック}能力以外にも色々^{セーフティ}と制限がかかっているのか？

……悪魔召喚プログラムの仕様か単純にマグネタイトが足りないのか。

……分からないなあ。

「……何故貴様がここにいる？」

「面白い人間がいるって風の噂で聞いてね。見物兼観光……だったんだけどね」

「……そういうことか。一体何処から噂が広がっていくのやら」
疲れた顔をする。

……魔王でもそんな顔をするんだねえ。

反応的になにか知っているみたいだ。

聞いたら丸焦げにされそうだから黙る以外の選択肢はないんだけどね。

ああっ……！ 忘れてた。

……時間をかけ過ぎるのは不味いね。

「あ、仲魔になっちゃたからボクはこれで」

「そうか。……ん？ ……今なんていった？」

「……サマナーの仲魔になったんだ。今そのサマナーが生死を彷徨つてるから急いでるんだよね」

「……貴様が……仲魔……に？」

なにありえないものを見た様な顔をするのさ。分かるけど……初のサマナーだしね。

ボクを知る悪魔が聞けばこうなるか。

「ああ、死なれても困るしね。……失礼するよ」

「……持ってけ」

何かを投げ渡される。

爆弾？ ……なわけないか。

「ん？ ……これ……」

封筒？ ……金、だね。

それも大金レベル。

「何を買うのか知らんが足りるだろう」

「……借りは返さないよ？」

「貴様に貸しなど作りたくないわ。……ふんっ」

男性に戻ると踵を返す。

……ふうん。ならありがたく使わせてもらうよ。

路地から出ていくベリアルを見送り目的地へと歩き出した。

第5話

……寝てたんだ。

肌寒い。

あれ？ 包帯……？

……枕変えたっけ？

「おはよう」

スーツを着た若い男性がウチを眺めていた。……あ、膝枕……!?

「……！ あ、退きま……っぐ」

力を入れると駆け巡る激痛。

苦痛に歪めた顔を晒すことになった。

「おっと！ 寝てないとダメだよ。手当はしてあるけど致命傷までは見れないからね」

ボサボサなつたウチの髪を撫で薄く微笑んだ。

「……ご……ごめんなさい」

「ディアラマぐらい使えば良かったんだけどね」

ディアラマ……？

……この人が助けてくれたんだよね。

悪魔召喚プログラムから出てきてウチを――

「どうしたいんだい？」

「……悪魔、なの……？？」

「そうだね。ボクは悪魔だよ」

やっぱりそうなんだ。

悪魔……友達を殺した……。

「……あの……」

「うん？」

「……助けてくれて……ありがとう……ご……ござい……ます」

……この人は関係ない。

助けてくれたんだ。……声に答えてくれた。

「…………てつきり怒られるかと思っていたよ」

驚いたのか目を白黒とさせている。

怒る？ ……なんで恩人を怒らないといけないの。

「だって…助けてくれて…治療…も…」

治療…も？ ……あ…肌寒いのって…。

……下着姿で膝枕されてたの!?

「……ぐう…」

痛い。……それよりも恥ずかしい。

「ああ服だね。どこにあるか分からなくてさ。脱がせた服は裂けたり焦げたりと酷かったから処分しちゃったよ」

「……すいません」

「服…着させた方がいいかな？」

「…お願いします」

動けないのがもどかしい…。

「これでいいかな？」

「……ありがとうございます」

「礼なんていらさないよ。ボクは君の悪魔だからね
人間に服を着せる日があるなんてね。」

年頃の少女。悪魔とはいえ……かな。

当分は動けない。

良くて腕が動かせるくらいか。

悪魔ならマグネタイトさえあればどうとでもなる。
病院に連れていくべきなのか。

……やっぱり分からないや。

「……ウチの悪魔」

それよりも説明だね。

「まずは自己紹介をしようか。ボクは魔王 ロキ。こんな見てくれだけど立派な悪魔さ」

「……ロキさん。私の名前は——」

ロキ、さんか。さん付けなんて初めてだよ。

ふんふん、悪魔を知って悪魔召喚プログラムをインストールしたんだ。

きつかけはバイト先に高校の先輩が悪魔を連れてきた、ね。
その先輩が面白い人間かもしれない。

……接触する機会はある、か。
本来は目的はコツチだし都合はいい。

「さんはいららないよ。親しみを込めてサマナーちゃんと呼ばせて貰うよ」

「サマナーちゃん……うん、ウチもロキって呼ぶね」

彼女が初めて笑顔を見せてくれた。

釣られて口が綻ぶ。

自己紹介以外にも悪魔召喚プログラムやデビルサマナーのことを教えないとね。

その前に――

「……あ……」

飢えた音が聞こえる。

「ハハッ。……なにか食べようか」

「……うんっ」

食事だね。

仲魔……にデビルサマナー……。

……メシア教にガイア教。

動かせるくらいには回復した腕を使いスマホを手に取る。

悪魔召喚プログラムを……開く。

二度目だけど目に悪いデザインは相変わらずだった。

「……MAGが減ってる」

ロキを召喚したからかな。

500から0……すっからかん。

「……? ……??」

☒が……5000? 増えてる?

「勝手に換金しといたよ。因みに1マツカは1000円の価値があるんだ」

マツカって読むんだ。1マツカが100円。

……1マツカが100円？ ……え？ じゃ、じゃあ…!?
「50万!? ……ったあ…」

そ、そんな大金持つてないよ！
50万……バイト半年分……。

「安心していいよ。ボク持ちだし」

「だ、だけど……」

「元はボクの金じゃないしね」

「え」

……犯――

「古い友人から貰ったんだ」

「……貰った？」

「そうそう。俗世的に言うなら少し早いお年玉……かな？」

お年玉。 ……お年玉で50万……。

……う、羨ましいとけど……金銭感覚狂いそう。

「残りはサマナーちゃんに渡しておくね。ボクからのお年玉つてこと
で」

分厚い封筒を渡された。

……チラツと見えたお札の束……。

「……あ、あの……えと……おいくらですか……？」

「色々買ったから……40万ちよつとだね」

「よ、よよ……40万!?」

持つ手が震える。

「この怪我じゃバイトはできないし生活費として使えばいいんだ。
……買い物に行つてくるよ。何か欲しいものはあるかな？」

「え、……あ、えっと……プリン……」

咄嗟に出てきたのがプリン。

……恥ずかしい……泣きたい。

「プリンだね。食べ物は適当に買つてくるよ」

「あ、……行つてらっしゃい」

「行つてきます」

……無くしたら怖いし枕の下に置いとこう。

行ってらっしゃい……。
この言葉を言ったの……。何年ぶりかな。

第6話

「……うん、大丈夫」

びっこしつつも歩けるようになったかな？

「っ……たあ……」

……地に足を着ける度に太腿が鋭い痛みを走らせる。

包丁が深く刺さっていたんだから当たり前。

寝たきりじゃなくなっただけマシ。

ゆっくりお風呂も入りたい。

学校は流石に行けないけどリハビリがてら近くを散歩するのもいいかも。

……ちゃんと歩けるようになったらお墓参りをするんだ。

お葬式にも出られなかったし……お墓の場所は聞いたから……うん。

そして悪魔を探す。友達を殺した……あの悪魔を――

「おはようサマナーちゃん。……くあ……」

「あ、ロキ……大丈夫？」

ボサボサの髪を掻き欠伸をする。

疲れた顔をしていた。

「ん？ 大丈夫だよ。それよりも大分良くなったみたいだね。良かった良かった」

「……ロキのおかげだよ」

「フツツ……そっか。動き過ぎると傷口開くかもしれないから安静にね？」

「うん」

「んじや朝食を作」

「ウチがつくるよ」

料理はお嫁さんの必須科目！ だから。

「大丈夫？」

「大丈夫！」

良く友達……にも作ってあげてたから。

……もう食べて貰えないんだよね。

「……ならお願いしよっかな」

「うん！ 任せといて！」

……だめだめ！

こんな気持ちで料理なんてしたら不味くなっちゃう。

ロキにだって失礼だよ。

ウチの仲魔。

……美味しい料理をつくってあげるんだから。

……何を作ろうかな。

朝食だし重過ぎないものを……あつ。

食材……。

うん、冷蔵庫を見てから考えよ。

ソファに腰掛け彼女を眺める。

片足を引きずりながら料理をしている。

「ふーふんふん」

とても楽しそうだ。

……楽しそうに装っているんだね。

強い子だ。

肉体的にも……精神的にも……
フィジカル メンタル

悪魔に友を殺され自分も殺されかけたんだ。精神的に異常をきたしてもやむ得ない。

人間にしては面白い……と馬面が言っていたっけ？

間違っちゃいない。

世界で初めてボクを仲魔にしたサマナーだからね。

人間に呼び出されたことはあったけど……仲魔ではなかったし。

運命つてのは面白いものだよ。

「ロキは嫌いな食べ物とかある？」

目が合った。

嫌いな食べ物……かあ。

「特にないよ」

「わかった。もうちよつと待ってて」

ボクなんて気にしなくていいのに。

心地よくは思っけどき。

サマナー……ねえ。

飽きずに彼女を眺める。

仲魔、てのも悪くないね。

ツールやオーデインが見たらなんていうかな。

……ククツ。

「……ど、どう?」

「美味しいよ。ボクが作るよりは何倍もね」

よ、良かった……。

食材と相談した結果簡単なものしか作れなかったけどなにより腕が訛ってなくて安心安心。

「ぐ」馳走様」

「お粗末様」

ほつと息を吐く。

立ちっぱなしでクタクタの体をソファに預けた。

……学校、始まってるんだよね。

うん、散歩ぐらいなら――

「わひゃ!? ロキ……?」

いきなりの浮遊感。

「食後の散歩でも行こうか」

い、行きたいよ。

学校だっけ行きたいよ。

それはいいんだけど……。

「サマナーちゃんを歩かせる訳にはいかないからね」
「だからって」

お、お姫様だっこは……。

……あーもう! 分かりました……!

「……お願いします」

「サマナーの仰せのままに」
うう…絶対分かっててやってるよ。
意地悪な神様め……。

第7話

「……う、うーん」

「どうしたんだー?」

えーつと……玉ねぎみたいな頭を持つ鳥が仲魔になりました。

試しにデビルオークションを使ってみた。他にも色んな悪魔がいたんだけど高いし、気持ち悪いのもいて……お手軽でマスコットみたいなこの子を落札した。

……体が鳥……というか丸鶏^{まるどり}。色がこんがりきつね色。良い匂いがしたら大変だったかも。

……鶏肉食べられなくなりそう。

名前はオンモラキ。……名前しか分からない。ロキが言うには日本や中国に伝わる妖怪で危険性は無に等しい。

サマナー前提の話で一般人には危険らしいけど……。

悪魔でありながら食料にもなるってロキは苦笑いしてた。

……食べるの? って聞かれた時は首を横に激しく振ったのは昨日のこと。……悪魔を食べる……。

聞かなきゃ良かったと後悔した。

だって……悪魔を食べるっ、て……。

「オイラの顔に何かついてるか?」

……絶対にいけない。

「ううん……ちよつと困ってるだけ」

首を傾げるオンモラキを抱きかかえる。

あれからしつかりと歩ける様になった。

走れないけど学校には行ける。

休み続けて二ヶ月ちよつと。

学校では噂になってた。

行方不明になった。実は被害者の一人、とかも言われていた。

久し振りの学校はとても静かだった。

友達の事もあるから尚更かも。

不自然に優しいクラスメイトや先生に不快感を覚えた。気を使っ

てくれるのは嬉しい、けど……。

……バイトは辞めちゃった。

接客はできてもレストランのホール。

配膳やお会計もする。

何より速さが必要。

駆け足なんて当たり前。

走れない私じゃ足手まとい。

真面目にバイトをするならデビルサマナーで稼いだ方が効率いいって言ってたから……頑張ろう。

どんな仕事があるか分からないから不安。

でもロキとオンモラキがいるから大丈夫！

「んあ……おはよう」

「おはよー」

欠伸をしながらロキが降りてきた。

まだ朝の五時。

何時もは寝ている時間。

今日だけは早起きしないといけなかった。

バレンタインだもん。

……ちゃんと渡しに行く。

なんだけど――

「……なににしよっかな」

材料は色々買った。

作ろうと思えばなんでも作れる！

だからこそ何を作ればいいのか困る。

普通のチョコは味気ない。

といって凝りすぎても時間がかかる。

うーん……。

「……サマナー？」

考え込む私の顔を覗き込むオンモラキ。

……オンモラキ。……あつ！ これだ！

オンモラキをテーブルに立たせる。

「? サマ」

「動かないで!」

「つれ!? ……分かった」

うん。……少し手間がかかるけど。

「:サマナーちゃん?」

……いける。

早く起きちやっただから水を飲もうと下に降りたらサマナーちゃんと抱えられたオンモラキ。

朝早いねーと思ったらバレンタインだったね。

愛する人に気持ちを伝える日、と言われている。実際はウアレンティヌスの処刑日に過ぎない。

権力者を相手に愛を説いたのは面白い。

しかもキリスト教の司祭。

……まあ今のメシアには邪魔にしかならないだろうね。天使が愛を知ってしまったえば天使ではいられなくなる。

すなわち墮天を意味するんだ。

慈愛や愛欲……根源は愛。

それゆえ人に一番近い位置にいる天使が堕ちやすい。

寧ろウアレンティヌスが死んだことは都合が良かったり、ね?

「オイラだー!」

「動かない!」

「……なにをしてるんだい?」

「チョコを作ってるの」

額に汗を浮かべながら慣れた手つきでチョコを彫っていく姿は宛らピグマリオンのよう。

はしやぐオンモラキの隣に等身大のオンモラキが姿を現した。茶色で動かないことを除けばほぼ同じ。

最早それはチョコとは言わないよ?

「……ふう……もう大丈夫。後は色チョコを塗って……はい、オンモラキチョコ!」

笑顔で言われても反応に困るね。

「オイラだ！」

オンモラキは嬉しそうにチョコを眺めている。動かなければ見分けがつかない程正確に作られていた。

それで――

「誰に渡すんだい？」

「……え？」

「そのチョコを誰に渡すのかなって」

オンモラキは悪魔でありながら食料になる。

わざわざオークションで落として食べる物好きも居るぐらい。悪魔も人間を贄にすることがあるからお互い様かな。

「……あー……」

顔を青くさせていく。

「こ、これ……は……そう！ 先輩に渡すの！」

取って付けたような答えが返ってくる。

「流石に困ると思うよ」

「うぐっ……」

色まで付けたらチョコには見えない代物。女子高生が作ったなんて誰も思わないだろう。

「他のチョコ……作った方がいいかな……」

落胆した様子でオンモラキの姿をしたチョコを冷蔵庫に入れる。

「その先輩だけに渡すなら別にいいんじゃないかい？ 他の人にも渡すなら別としてね」

「……あ！ そうだよ！ ……ロキと友達の間も作らなきゃ……！ 時間がない!？」

これだけに二時間は使っていたからね。

スマホを確認したサマナーちゃんは慌てて……？

オンモラキが固まったまま動かない。

……あつ。

「サマナーちゃん」

「な、なに！ ロキ！」

「間違えてオンモラキを冷蔵庫に入れてるよ」

「…………え? ……嘘?! ごめん! オンモラキ!! きやつ!? いたあ
…」

「サマナーちゃん!」

走れないのに走ろうとするから。

派手に転び冷蔵庫に顔をぶつけるサマナーちゃん。

それを横目に冷蔵庫からオンモラキを出したが意外にも心地よ
かったらしい。

今も同じ姿をしたチヨコの隣で眠っている。…………キミって確か寒
さに弱くなかったかな?

あと聞き流しちゃったけどボクの方まで作ってくれるんだ。

ククツ…………嬉しいな。

すっかりホワイトデー返さないといけないね。

「遅刻する!?! 急がないと…………!」

帰って作ればいいのにな。

…………面白いからこのままでもいいか。